外部評価報告書

平成27年8月

福井大学アドミッションセンター

福井大学アドミッションセンター　外部評価報告書　目次

はじめに　　　　　　　　　　　　　　　　　アドミッションセンター長　　寺岡　英男

１．外部評価実施概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

２．委員会の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

　　質疑応答，意見交換　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

　　評価委員からの講評・提言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

３．アドミッションセンター外部評価結果　・・・・・・・・・・・・・・・・　11

は じ め に

アドミッションセンター長
寺岡英男

アドミッションセンターの前回の外部評価は３年前に実施しています。前回の評価では、高大連携活動の多様な展開と、それにもとづく追跡調査の取組み、あるいはきめ細かな高校訪問等の広報活動などは、高く評価されていましたが、今回も同様に高い評価を頂きました。

それに加えて今回指摘されたのは、そうした全国的にも評価される多様な活動を展開しているにも拘らず、それが専任教授と客員教授のみで担われ、専任准教授が未補充のまま推移してきていることの問題です。特に国の方から出されている政策課題である、これからの高大接続の入試改革への対応を考えると、その推進エンジンはＡＯセンターであるという外部評価での指摘と合わせ、率直に受け止めなければならない課題であると思います。

本学では、昨年設けた全学教育改革推進機構の下に、入試改革検討委員会を設け、これまで学部主導で行われてきた入試を、全学的なガバナンスの下に改め、これから求められる高大接続入試改革に対応して行こうと考えています。またＡＯセンターを高等教育推進センターの下に組み入れ、機能強化を図ることも考えています。さらには、つい最近提出した、共通政策課題(入学者選抜改革分)　概算要求事項では、高大接続入試について、これまでのＡＯセンターの高大連携の取組や評価の開発等の実績をふまえるとともに、それらを他大学と共同して入試改革等に取組む構想を提出したところです。

いずれにしても、今回の外部評価で頂いた率直な評価・意見をふまえ、これから対応を余儀なくされる高大接続入試に向けて、受け身ではなく積極的な提案ができるような、学内での検討とそれを行う組織的なしくみを作っていかなければならないと思っています。

最後に、今回の外部評価について、お忙しい中、評価・ご意見を頂きました外部評価委員の先生方に改めてお礼を申し上げます。同時に、今回いただいた外部評価が、広く学内で共有され、センターの取組みとこれからの課題について認識を深めるとともに、今後の入試改革をＡＯセンターが推進役となり、全学的に進めていく契機にしていければと思っています。

１．　外部評価実施概要

外部評価委員会次第

日　時：平成２７年３月２日（月）　１４：００～１６：３０
会　場：福井大学　事務棟第一会議室
日　程：１４：００　開会　アドミッションセンター教授挨拶
出席者の紹介
日程等説明
委員長選出
１４：１０　アドミッションセンター概要説明
「自己点検・評価報告書」
・センターの設置の理念・目的、組織・運営
・センターの入学者選抜に関する調査・研究
・センターの入試広報活動への関わり
・センターの高大連携に関する実践的活動
・センター教員の研究活動
・センターの施設・設備、財務と管理
１５：００　質疑応答
１６：００　講評・提言
１６：３０　閉会

外部評価委員名簿

委員長　寺 下　　榮　静岡大学全学入試センター長
委員　　白川　友紀　筑波大学アドミッションセンター長
委員　　船橋　伸一　富山大学アドミッションセンター教授（入試方法研究開発室長）
委員　　室崎　欣彦　河合塾中部本部　本部長

センター側出席者

大久保　貢　　アドミッションセンター教授
長谷川　重弘　アドミッションセンター客員教授
津田　良二　　学務部入試課長
加藤　秀志　　学務部入試課課長補佐
山本　恭弘　　学務部入試課入試企画調整係長
陸野　恵里香　アドミッションセンター係員

２．　委員会の概要

・開会挨拶

大久保教授から，アドミッションセンター外部評価委員会を開催するにあたり，出席いただいた４名の評価委員に対して謝辞があった。

・出席者の紹介，日程等説明及び外部評価委員会委員長の選出

大久保教授から出席者の紹介があった。続いて，配布資料の確認及び委員会の進行等について説明があり，本委員会委員長に静岡大学全学入試センター長　寺下 榮　氏を選出した。

・自己点検・評価報告書説明

基準ごとの自己評価の概要等について，アドミッションセンター教員，入試課職員から以下のとおり説明ののち，質疑応答を行った。

津田入試課長・・・自己点検・評価報告書　第１章
大久保教授・・・自己点検・評価報告書　第２章
長谷川客員教授・・・自己点検・評価報告書　第３章
大久保教授・・・自己点検・評価報告書　第４章
大久保教授・・・自己点検・評価報告書　第５章
津田入試課長・・・自己点検・評価報告書　第６章

【福井大学アドミッションセンター外部評価委員会　審議の様子】

・質疑応答，意見交換

寺下委員長　アドミッションセンターの准教授ポストが，空席となってから，かなり
［白川委員］　年度が経過しているのに，准教授が欠員のままというのはなぜなのか。

（回答）　前回の外部評価の時にも人員の補充が必要という評価であったが，アドミッションセンター長の話では運営費交付金が削減されて准教授をつけるまでの予算が確保できていないことが１番の理由である。アドミッションセンターを今後強化していかなければならないということであれば優先的にどんな形にせよ人員を補充し強化しなければならない。それは外部，内部を問わず，本学アドミッションセンターもそういう組織運営をしていかなければならないという話はあげているところであるが，現時点でも２２年～２４年度の当時と抱えている状況（人員不足の問題）は同じである。

（各大学の実情と意見）

船橋委員　昨年の１２月２２日に中教審が大学入学希望者学力評価テストを実施し，今後大学入試を大きく変えていくと発表した。こういった中でいろいろな改革をし，高大接続の推進エンジンとなるのがアドミッションセンターであって，国をあげて強化していかなければならないと思う。富山大学アドミッションセンターも准教授のポストが空席になっているが，今後，教授ないし准教授１名，それからもう１名は客員教授を採る予定である。さらに正規の職員も配置するという話も出ている。ぜひ福井大学も人員を補充してほしい。富山大学では今年度から AO 入試の募集が５名のみ（１４名から５名に変更）の募集になり，たった５名のための AO 入試をやっている。しかも入学前教育は担当していないという状況に比べて，福井大学では大久保教授をはじめとして長谷川客員教授もかなり AO 入試や入学前教育に関わっているということで，スタッフの人数がすごく少ないのではないかと強く思う。

白川委員　筑波大学では今年３月で私（教授１名）が定年になり再雇用となるが，後任の採用として准教授の公募をしたが適切な人がいなかった。それでもポストを空けておくわけにはいかないということで准教授でなくてもよい，助教あるいは任期付き，テニュアトラックなども含めて再度公募して選考することとなると思う。そういう状況で，ポストをあけておくと大変なことになるということで非常に危機感を持っている。欠員補充はどんどん進める必要がある。

寺下委員長　状況は非常にどの大学のセンターも似ている。静岡大学全学入試センターには３名の教員が来年の３月末をもって全員が退職する。それに対して学内から１名を補充し，もう１名は今後公募する予定で，来年度は１名減の形でスタートすると思う。センターの教員を来年度は実質１名減らすけれども逆にそれを全学の委員

会等で，これからは国立大学といえども，やはり人を減らすような方向でないと大学はもたないであろう，その先鞭をつける意味で私どもセンターは３名を２名にして積極的に人を減らし，他の部局学部に関しても人を減らすような努力をすべきだということを言っている。これからは入試広報関係であれば何も教員ポストでなくとも，職員や再雇用職員などの形で広報担当や入試相談会を経験しているような適任者がいれば，そのような形もありうるだろう。最終的にやはり予算を考えないといけないということで表現的には１名ポストは減らすが，フルタイムで来る必要はないということもあり，退職した方を再雇用しようということで乗り切ろうと考えている。それはおそらく他の国立大学のアドミッションセンターも同じような位置付けにあるのではないかと感じた。

寺下委員長　全学部でアドミッションセンターが関わるといった面で，例えば看護学科あたりは地元密着に近いところもあるだろうし関わってもよいのではないか。あるいは新しい組織，学部，学科なりできたときにアドミッションセンターが積極的に関わるというような検討はしているのか。

（回答）　これから大学の中に全学教育機構というものを作り，その下に入試改革委員会を作る。その中で，今後の課題ではあるが，高等教育推進センターとアドミッションセンターとの位置づけについては，アドミッションセンターと高等教育推進センターの中にある入試企画部門の組織面の在り方をどうするのかというのを今回の組織再編の中で少しすっきりした形でまとめ，より全学的な組織にしていくという状況にある。

室崎委員　アドミッションセンターに入試相談室をおいて随時相談者を受け入れているということであるが，年間どれくらいの相談者が来校しているのか。また，予約制なのか。

（回答）　アドミッションセンターまで相談に来た場合は，予約制ではなく入試課の職員も随時対応している。メインはオープンキャンパスや地域の人に開放している大学のイベントで，そのときに入試相談コーナーを設けて相談を受けている。

室崎委員　高校の教員から，大学の研究施設などを見学し説明してもらうと生徒が大学進学にすごく興味を持つので推進したいが，なかなか受け入れてくれる大学がないという話をされることがあるがどうか。

（回答）　高校に関しては大学のほうから６，７月に説明会に行っておりそのときがメインになる。ただそれは教育地域科学部と看護学科だけで医学科と工学部は実施していない。生徒から事前に連絡があれば学科に紹介するなどの対応をしている。

室崎委員　福井大学は見学できるということで高校に紹介可能か。

（回答）　平日であれば対応可能である。

寺下委員長　AO 入試合格者の入学前教育は今度できる機構の中の組織に手渡すべきではないか。入ってきた学生をどのように教育してどのような学生を卒業させていくのかということを考えれば当然のことながら AO 入試合格者への教育という部分は少し手放したほうがよいのではないか。

（回答）　AO 入試で入ってくる学生は数学，物理でつまずく学生が多いため，高校数学を，数Ⅰ，数ⅡB，数Ⅲと段階を踏んで１０月の合格から３月までの間に数Ⅲを中心に３回に分けて入学前教育を行っている。特に福井県内の工業高校の場合は，通常の授業では教えていない範囲について，特別に大学入学希望者を集めて，数学や物理を教えており，今年の AO 入試Ⅰ合格者をみてもすごく意欲的に取り組んでいる。入学前教育で高校数学を完璧に教えることはできないが，入学前教育の数学や物理の課題を通して大学に入ってから，がんばろうという意欲を見出し，早期に指導することができることは，メリットであると感じる。またアドミッションセンター以外の組織で入学前教育を行うほうが効果があるかも知れないが，現在でも学科によっては入学前教育として課題を出している学科もある。

船橋委員　英語と数学については（アドミッションセンターが）問題作成と採点および添削指導を行うとあるが，これは長谷川客員教授のほうで英語，数学の問題作成をしているのか。

（回答）　入学前教育では，平成２５年からは数学と物理だけ実施している。物理は簡単な内容だが数学はボリュームを多くしている。

船橋委員　学生はまじめに自分でやってきているのか。それとも高校の教員がサポートしてやっているのか。

（回答）　実情としては，教員のサポートがなければ取り組めない状況にある。ただし高校によっては関与していない高校もある。

入学前教育とはもともとは補習授業的なところからスタートしたが，動機づけも含めて，入学後のカリキュラムの前倒し的な一括りの中の１つだという認識が共通認識として持てれば学部学科にスムーズに降りていって，そこにアドミッションセンターが絡んでいきながら両者で支えていくというのが１番よいのではないかというイメージは持っている。内容的には，今の数学と物理や以前行っていた英語など，今の内容でよいのかということはこれからの議論になってくるだろうと思う。ただ，やることが目的ではなくてやることによって新入生がどういうふうにシフトしていくのかというところをしっかり見ていかないといけない。ただやることに満足を得てしまうようでは意味がないという印象はもっている。

長崎大学や鳥取大学は泊まりがけで学部の教員とアドミッションセンターの教員と協同で入学前教育を実施している。我々も理想としてはそこまでやりたいが予算と負荷の問題もあり躊躇している。それがすべて良いということではないがそ

ういうふうな位置づけで取り組んでいる大学もあるということも視野の中に入れて考えていかなければいけないのではないかと思う。

（以下意見交換）

室崎委員　福井大学の医学部は後期で非常に良い生徒をとってくれる。たまたまセンター試験を失敗する生徒もいる。福井大学では，小論文や面接をきちっと評価してもらえる。逆転できる大学の１つである。そのことをぜひ続けていただきたい。

白川委員　後期は面白い学生が多い。それがセンター試験だけではないところの良いところである。証拠はないけれどもサイエンス・インカレに出る学生は後期日程入学者がけっこう多い。前期は出ない。そこで差が出ているように思う。

大久保教授　１０年以上 SPP や高大連携事業をやっているわけだが，高校教育は以前からの暗記中心という教育で大学に合格することが目的である。以前の高校教育とあまり変わっていない。それは大学入試で変えるべきである。多様な学習成果の評価結果を大学入試で活用すると高校も変わるのではないか，文部科学省もそういう風向きになっているが，どうか。

白川委員　せっかく課題研究をやってもそれを全然見てもらえないというところはやはりある。高校の様子を見ていると２年生までは課題研究をやるけれども３年生になったら受験勉強に切り替える。そのほうがわりと確実に志望校に入れる，きちんと模擬試験を受けてやっていくほうが確実に合格できるというところがまだまだ辛いところである。そのあたりがもう少し変わってくればと思うが，まさに今回，この中教審がそれである。

寺下委員長　大学生活にも慣れてきた２年生の学生に高校時代と大学時代と何が１番大きく変わったかを簡潔に書かせると必ず，高校時代には，特に進学校では，暗記主体で対応してあとはセンター試験をがんばればということだけを言われてきたが，大学に入ると暗記ではまったく通用しないことがわかった，と書いてくる。そういうことを２年生くらいで気づく場合がけっこうある。それも理系ではなくて文系の学部でそう言っている。

白川委員　文系のほうがそうだと思う。理系はまだまだ３年４年になっても暗記中心でなんとかなる。教員のほうもなんとか点数をとらせて卒業させようとする。授業で言ったことをちゃんと覚えて答案に書いたら良い点あげてしまう。

船橋委員　（私は学生に）必ず試験とかでも意見を求め，いろいろな理論を踏まえて，それをどう活かすか，どう考えるかというかたちで聞く。単に暗記しているだけではなかなか書けないような問題を出すので，学生たちも暗記では通用しないことが

わかってくる。経済学（分野の試験）では，もちろん穴埋めのテストをする教員もいるが，（単に）言葉を覚えたところで意味がないだろうと思う。理論を使って何ができるのかということを授業で注意してやっているので，（学生たちは）暗記ではないのが大学の授業だということを感じていると思う。

白川委員　大学の教育の評価というものを外からと考えたときに，JABEE があるがそれもシステムの評価であるわけで，デザイン力や創意工夫する力，イノベーション力を育てるような教育をちゃんと行っているのかということを見ているだけで本当にそれがどれだけ効果が出ているのかというのはわからない部分もある。そういう意味ではサイエンス・インカレのような評価が入ってくると恐い。高専の学生に大学生が負けてしまう。

室崎委員　暗記であるとか合格可能性の可視化というのは必要な部分もあり，いろいろなことでメッセージを出してはいるが，もう一つ別のメッセージも出している。大学ごとの入試問題の解答を出し，翌年の対策のために分析してコメントを出しており，良問悪問という指摘をさせてもらっている。この中で良問だというのは基本的に分離性というものを追及する問題，ことの本質，それから何かの知識と何かの知識をもってして解ける融合問題は良問としている。単に記憶や確率で当たってしまうものはあまりよろしくないというふうにしている。それこそがちゃんと自分たちがやらないといけないことだと思っている。双方で良い問題であって良い選抜がなされればと思っている。大学に入ってからの能力が全然ないとなると何をやってきたのだろうと思い残念である。

寺下委員長　国立大学には最初からずれてくる学生はそんなに見当たらないし極めて良い集団をまずは引き受けているのではないかと思うが，せっかく入ってきた学生を学部のほうでもっと上手に育ててほしいという意識はもっている。工学部の教員と話して感じることはないか。

（回答）　特に福井県や愛知県の場合，高校時代に手取り足取り親切にしているので大学に入ってから伸びない傾向にある。例えばセンター試験プレテストを実際の試験場でやっている。大学は主体的にやっていくところなので高校教育も変わってほしいと思っている。

・評価委員からの講評・提言

船橋委員　今後入試は非常に大きく変わっていかなければいけない。そういった中で推進エンジンになるのがアドミッションセンターなので，今後ともやはり教授か准教授かの補充というのはぜひ進めていただきたい。富山大学の AO 入試の募集定員は１４人で，来年からは５人になる。つまりたった５人だが，福井大学は７４人ということで全く規模が違うということもあるし，富山大学では入学前教育は全く

タッチしていないなかで，福井大学は入学前教育，スクーリングも実施している。さらに学業成績の追跡調査も行っている。これはやはり非常に特筆に値すると思う。さらに福井大学アドミッションセンターの最大の特徴というのは，理科教育を中心とした高大連携プログラムであろう。富山大学が（入試講演などにおいて）完全に経済分野に傾いているのは，私の専門に由来しているからであり，理科教育はやっていない。福井大学は高大連携で，理科教育で貢献している。科研費もとっているし，これは大久保教授の活躍が大きいのではないかと強く思う。学問的背景が，学生募集に対しても非常にプラスな，有意な影響を及ぼしていると判断した。また福井大学のアドミッションセンターは，北陸の国公立のコンソーシアムの立ち上げの中心になった。実際，長野や名古屋，京都で説明会を行い，マスコミにも取り上げられ，毎日新聞では全国バージョンで掲載された。朝日新聞，富山の富山新聞や北日本新聞，中日新聞をはじめ，北陸の４大学はこういうことをしていると記事になった。さらに日経の全国版にも掲載された。大久保教授は，広報の面でも，また研究の面でも非常に活躍されており，長谷川客員教授もそれを非常にサポートされているということがよくわかっているので，この場を借りて敬意と感謝を示したい。

加藤補佐　AO 入試の人数を減らした原因というのは推薦に戻るからなのか。

船橋委員　（その部分の定員は）一般入試の募集定員に振り分ける予定である。今，経済学部には経済，経営，そして経営法学科という法律系の学科があり，３人ずつ合計９人が AO 入試の募集定員である。それから理学部地球科学科が５人募集しているので今まで合計１４人だった。経済学部が来年から AO 入試を廃止し，９人は前期に振り分ける。９人の募集であるが，実際にとっている学生は２人くらいであるから，AO 入試は学部の負担が非常に大きいという理由で廃止した。

加藤補佐　福井大学の工学部は推薦入試から AO 入試に振ったがまた推薦に戻るような動きもある。富山大学は東京のほうに試験場を設けられたがその評価はどうか。

船橋委員　今回，新しく２つ試験会場を設けた。今までは理学部と工学部が福井大学の翌々年くらいに名古屋に試験会場を設けて７，８年やってきた。これに加えて経済学部も今年から名古屋に試験会場を設置した。また工学部でも東京（さいたま市）に試験会場をつくった。その理由は北陸新幹線が開通するということと，８学部２３学科という日本で十数番目に大きい国立であるにも関わらず，今のままでは影が薄く関東圏においても知名度がないということだった。つまり学生を集めるということより，どちらかというと知名度アップのために東京試験場を設置した。今年は４５人の志願者があり，ほぼすべてが関東圏それから東北であった。当初の予想では多少長野から流れるのではないかと思ったが，長野からは誰もいなかった。こうした（入試の）取り組みはテレビにも取りあげられ，NHK におい

て，富山では夕方，愛知や東京では朝放送され，なぜ（地方試験会場を）設置したのか，今後どうしていきたいのかという内容を（船橋が）語った。

室崎委員　福井大学アドミッションセンターはこれだけの範囲を１人でやるというのは本当に大変なことだと思う。生徒を送り出す側としては特に最近思うのはミスマッチで辞めていく子たちを本当に１人でも少なくしたいということである。私たちも大学のことをよく勉強して伝えていかないといけないけれども，大学のほうも生徒たちに自分の大学の内容を伝えていく機会を持ってもらいたい。１人でも多くの学生が満足して卒業していってくれればというふうに思うので入り口から出口まで大変だろうけれどもぜひそういう活動を続けていただければと思う。

白川委員　筑波大学は AO 入試を古くからやっているということでだからといって必ずしもうまくやっているとは限らない。東北大学は推薦入試ではなくて AO 入試で全部やる，逆に九州大学は従来の推薦入試ではないかたちで別な人をとりたいということで AO 入試を始めた。東北大学は推薦入試に近い AO 入試というかたちでどちらかというと福井大学も東北大学に近いタイプの AO 入試というふうに認識している。やはり AO 入試といえども高校等との連携をうまくとっていくということが大事なことだと思う。高大連携事業もアドミッションセンターのほうで引き受けており SPP も全部やっているということでこれを１人で全部やっているということは本当に大変なことで従来から非常にすばらしいことだと思っている。しかし，どうしてもやはり負荷が大きいというふうに思う。そういった事業がうまく実を結び，工業高校からの学生が，入学前教育や１年生のときの成績は悪いけれども非常にマッチングがよくて後々３年４年になったときには成績が良くなっているということが本当に絵に描いたようにうまくできていてきれいに続いているということは大変素晴らしいと思う。留年率が２割というのはやはりポリシーがはっきりしてないところがあるという気がしている。そこのところをもう少しうまく分析し，どういう良いところがあってどういう対応をすればよいのかということを考えていくことができればという気はする。長谷川客員教授が非常に一生懸命やっていることに感心し，補習教育だけれども実は知識やスキルを身に付けるのではなく大学に入ったら勉強する気にさせるということがポイントだと思った。

寺下委員長　静岡大学や他のアドミッションセンターの教員に聞く話とかなり似ている部分があるという印象を受けた。アドミッションセンター設置から１２年経過し，大変な努力があったと思うがそれを高く評価したい。国立大学が法人化された後，様々なセンターが出来た。現在も国際や地域と名前がつく，いろいろなセンターが作られてさらにそれを全部かぶせた機構というような大きな組織にしようという動きがある。その中で大きく立ちはだかる学部の壁を感じる。その立ちはだかる学部の壁をどれだけ突き崩すかあるいは説得するかというところでそれぞれの

センターが不振しているのではないかというような印象をもっている。その中でこれだけの活動は非常に高く評価できると思う。ある大学では，他の学部では任期制がないのにセンター教員だけ任期制教員が入っていたり，評価方法も異なっていたりと学部の壁が厚い。その壁を打ち破る１つの大きな方策としては高大接続改革実行プランである。一般入試，推薦入試，AO 入試の区分を廃止した新たなルールを作ることはできるのか。知識，理論のみならず様々な思考力，表現力，判断力をあわせた新たな選抜を求めている。そういった入試を具体化するとなればそれこそ現在福井大学アドミッションセンターが実施しているような様々な事業や知見が，全学的にもすばらしい意見になるのではないかと思う。学部教員が高大接続改革実行プランというのは大変なことだと気づく前にぜひアドミッションセンターとしてこういうことをもうすでにやっている，このような選抜方法があるといったようなことを提案すると益々、今以上に注目され，学内的にも高く評価されるのではないかという気がしている。

・閉会・謝辞

大久保教授から，評価委員に対し，外部評価委員会への協力等に関するお礼の謝辞と閉会の挨拶があった。

３．　アドミッションセンター外部評価結果

１．各章の数値評価について

各章について，評価委員に次の５段階で評価して頂いた。

５：　優れている。あるいは，適切である。
４：　やや優れている。あるいは，ほぼ適切である。
３：　普通。あるいは，どちらとも言えない。
２：　やや劣っている。あるいは，あまり適切とは言えない。
１：　劣っている。あるいは，適切ではない。

区分	A委員	B委員	C委員	D委員	平均
第１章　センターの設置の理念・目的、組織・運営	4	5	3	4	4.0
第２章　センターの入学者選抜に関する調査・研究	5	5	5	5	5.0
第３章　センターの入試広報活動への関わり	5	5	5	5	5.0
第４章　センターの高大連携に関する実践的活動	5	5	5	5	5.0
第５章　センター教員の研究活動	5	4	5	4	4.5
第６章　センターの施設・設備、財務と管理	4	3	4	4	3.8
総合評価	5	4.5	5	5	4.9

２．各章のコメント及び総合評価について

評価委員に下記のとおり各章についてのコメント及び総合評価を頂いた。

第１章　センターの設置の理念・目的、組織・運営

A 委員　　大学入試を取り巻く環境が、今後、ますます厳しくなることは確実である。しばらく空席となっている教員ポストの補充をすべきである。

B 委員　　理念と目的を定めて、そのために必要な組織を定め、目的に沿って運営しておられ、特にＡＯ入試で多くの学生を入学させていることから、優れていると考えます。センターの教員が長く欠員となっている状況については問題点と考えておりましたが、他の委員から経費をかけないという点で評価するとの意見もありましたので、特に問題点とはしないことにいたします。しかし、今後、18 歳人口の減少やさらなる業務の充実、高校等との情報交換の継続を考慮され、充足を検討されることが望ましいと考えます。

C 委員　平成 26 年 12 月 22 日、中央教育審議会は、段階的に「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を実施し、高大接続改革を進めるため、高等学校教育、大学教育およびそれらを接続する大学入学者選抜の抜本的な改革を提言した。この改革の推進エンジンとも言えるのがアドミッションセンターであり、各大学において、さらなる拡充が求められることとなった。なお、福井大学では、平成 19 年に設置された高等教育推進センターの入試企画部門をアドミッションセンターが担っている。ただ、人員配置を見ると、准教授ポストが欠員となっており、今後の改革を進めるためには、人材の確保が求められている。

富山大学における平成 26 年度の AO 入試の募集定員は 14 人であるが、福井大学では、これをはるかに上回る募集定員（平成 26 年度は 74 人＋若干名）を擁している（資料番号 1)。このように多くの募集定員を有することに加え、入試に関わる委員会が少なくとも 8 種類あるように思われることから、これらの点からもいっそう准教授ポストの補充が必要であると感じられる。

D 委員　センターと高等学校との積極的な連携活動によって、より理想的な学生の確保が実現されるが、更なる実績への役割を果たすには全学的な協力体制は不可欠である。

第２章　センターの入学者選抜に関する調査・研究

A 委員　積極的な情報収集や情報交換会への参加を高く評価したい。AO 入試における選抜方法の改善や入学前教育の実施に関して、学部との議論を一層深めていただきたい。

B 委員　様々な方法で調査・研究を行っておられることが評価できます。特に高校訪問数が続伸していること、入学後の学業成績の追跡調査を学科ごとに詳細に行っておられること、入試広報の調査・研究も行っておられることが優れていると考えます。

なお、改善を要する点に「各学科が揚げるアドミッション・ポリシーに基づいて‥」とありますが、平成 27 年 1 月 16 日に発表された「高大接続改革実行プラン」において、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの一体的な策定が求められていますので、これから、単なる学業成績ではない「学修成果」に基づいた追跡調査を実施し、ディプロマ・ポリシーと進路状況、カリキュラム・ポリシーと学修実績なども評価対象とした一体的な評価を検討されることが望ましいと考えます。入学前教育で高校の補習ではなく大学の学びへの導入を行っておられることや、工業高校からの入学者が初年次の学業成績はふるわないが学年が上がるにしたがって活躍するようになるという話とも関連するのではないかと思いました。

C 委員　福井大学アドミッションセンターは、入学前教育・スクーリングの実施などにおい

て深く関わっている（資料番号 12~16）ことに加え、学業成績の追跡調査（資料番号 9~11）、新入生アンケート（資料番号 17~19）など、十分な調査分析を行っておられることは特筆に値する。また他大学とも連携した研究（資料番号 2~8）を行い、成果も着実に生み出しておられることが窺える。

D 委員　入学者選抜方法別による学業成績の追跡調査には大変関心を持ちました。今後益々変化してゆく選抜方式において、質的人材確保と選抜方式の関係に関する研究は大切なテーマですから研究を深めていっていただきたい。

第３章　センターの入試広報活動への関わり

A 委員　広報活動を積極的に展開されていることを高く評価する。

B 委員　アポイント無しの高校訪問を実施できておられるのは、これまで長年にわたって高校訪問を継続し、高校の状況を熟知されたことの成果であると高く評価します。アドミッションセンターの専任教員を擁して築き上げた高校との関係や訪問方法のノウハウは貴学の財産であると思います。また、他大学との協同の説明会の開催を拡大しておられることも評価できると思います。

C 委員　資料を拝見すると（資料番号 20~28）、広報活動に情熱を傾け、効果的に行っておられることが分かる。大久保教授は、平成 22 年に北陸の国公立大学の広報コンソーシアムを立ち上げられたが、その活動は年々拡大している。平成 26 年度には名古屋市、京都市、長野市で説明会を実施したが、長野市での説明会は当日の長野朝日放送で放映されたばかりか、朝日新聞（平成 26 年 11 月 15 日長野版朝刊）、信濃毎日新聞（平成 26 年 11 月 15 日朝刊、同 11 月 29 日朝刊）、毎日新聞（平成 26 年 12 月 5 日夕刊全国版）をはじめ、多数のメディアで取り上げられた。やみくもに活動するのではなく、戦略的に活動しておられることが窺える。

D 委員　長年にわたり生徒や保護者への広報活動や、高等学校を通しての広報活動など大変積極的に行っておられる熱心さはよく伝わってきます。これからも方法論等検討してください。

第４章　センターの高大連携に関する実践的活動

A 委員　他の国立大学アドミッション部門には見られない積極的な取り組みに対し、高く評価する。

B 委員　従来から SPP による高大連携活動を行っておられましたが、さらに発展して、高大連携を単なる社会連携の実践とするのではなく、科研費を利用した研究として設定し、効果の検証をしながら実施しておられることが優れていると考えます。また、高大連携数理教育研究会の実施は、工学部の教育と高校教育の間の隙間を埋めるという、従来から必要とされてきたことであるにもかかわらず、あまり実践されていなかった活動で、今後の進展を期待します。

なお、課題研究の評価を大学入試に活用することについては、情実や恣意あるいはごく少数の大学教員によって選抜が行われるのではないかという疑義を持たれないよう、入試選抜の仕組みを工夫する必要があると考えます。

C 委員　福井大学アドミッションセンターの最大の特長であるのが、理科教育を中心とした高大連携プログラム（資料番号 29~43）であり、高校生の動機づけに多大な貢献をしているものと推測される。これは大久保教授ならではの活動であり、高く評価できる。

D 委員　単なる情報伝達型の高大連携ではなく、教育支援を視野に入れた連携を考えた活動とされている点を高く評価いたします。更に学生の入学後にも目を向けられた点も評価いたします。

第５章　センター教員の研究活動

A 委員　限られた時間の中での積極的な活動に敬意を表したい。

B 委員　センター専任教員が少ないにもかかわらず、科研費の獲得、入研協や大学入試研究ジャーナルでの発表など、他大学のアドミッションセンターの教員と同等かそれ以上の研究を行っておられます。教員の欠員が補充されれば、さらにセンターとして活動の余裕ができ、センターとしての研究成果が出るのではないかと考えます。

C 委員　入試広報と研究活動が分離したものではなく、そのふたつが相乗効果により、優れた研究成果を生み出すことが可能なことを示唆するものとなっている。アドミッションセンター所属・准教授ポストの補充は、さらなる成果を生み出す大きな助けとなると期待される。

D 委員　大変多忙の中研究活動を行なっておられる事は高く評価いたします。願わくば人員の補強による更なる充実を御願いいたします。

第６章　センターの施設・設備、財務と管理

A 委員　入試はもちろんのこと、国立大学（法人）に対し、さまざまな「変革」が求められている。ヒト（人員）・モノ（組織）・カネ（予算）をこれまで以上に有効活用する方策を前向きに検討していただきたい。

B 委員　国立大学のアドミッションセンターとしては他大学とほぼ同等の規模、内容なので普通と考えます。今後、欠員の補充を含め、業務の効率化などにより、高大接続改革実行プランにどのように対応していくか検討されることが課題であると思います。

C 委員　アドミッションセンターという名称が社会で広く浸透していることから、残すことにしたという貴校の判断は適切であったと思われる。また、アドミッションセンターの業務は、今後とも拡大していくことが予想される。そのため、准教授の補充に加え、センター専従の専任事務職員の配置は、喫緊の課題であろう。適切な人員配置により、業務が滞ることがないよう努めていただきたい。

D 委員　センターの運営は大変円滑に行なわれているように見えますがかなりマンパワーに頼っているところが伺えます。やはり人員確保によるより安定した活動環境を希望します。

総合評価

A 委員　アドミッションセンターとしての役割は十分に果たされており、各種活動を高く評価したい。本年 1 月、文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が提示されたが、これによれば「入学者の選抜にあたって、個別選抜の改革を推進すること」「一般、推薦、AO の区分を廃止した新たなルールの構築」等々、極めて近い将来、入試環境が大きく変わることを示唆している。AO 入試の実施と改善、入試広報、各種調査・研究、高大接続の取組等々、福井大学アドミッションセンターがこれまで蓄積してきた知見・ノウハウが福井大学だけでなく、他大学にも大きな影響を与えるものと思われる。アドミッションセンターの益々の発展に期待したい。

B 委員　従来から高校との良い関係を追求してこられ、高大連携と広報の両面でその特長を強化しておられるところが特に優れていると評価します。今後、単なる学業成績ではない「学修成果」に基づいた評価を実施する際に、ＡＯ入試や広報、高大連携の成果として得た特長を全学的に活用して、さらに高大接続を進展させることができると考えます。

C 委員　福井大学アドミッションセンターの大きな財産は、大久保教授であり、その学問的

背景が学生募集に多大な貢献をしていることが窺えた。専任教員１人、客員教員１人という少ない人員で、幅広い活動をしておられるが、准教授の欠員は可能な限り早く埋めるべきであると思われる。

福井大学アドミッションセンターが、北陸地区の国公立大学のコンソーシアムに加え、中部地方の国立大学のコンソーシアムにおける活動に対して、多大な貢献をしておられる事実に、敬意と感謝を示すとともに、さらなる発展を期待したい。

D 委員　日頃の活動に対しては本当に良くやっておられるものと高く評価いたします。これから大きな転換を迫られる入学者選抜において、これまでの経験と実績に基づいた選抜方法の開発と研究にも大いに期待をいたします。